

『価値ある情報』
1975年10月

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)

中国の水滸伝批判は何を意味する？



▶水滸伝批判の波広がる 中国 修正主義反対の材料 大衆教育運動を展開か(9.1朝日)▶中国、「水滸伝」批判、大きく展開 人民日報、放送も 文芸のワク越え新「思想闘争」へ?(9.1毎日)▶ある日突然の水滸伝批判 現代の宋江はだれ? 毛主席が指示…憶測呼ぶ(9.12日経)▶「水滸伝」反面教材の役割 「投降のための謀反」を批判(9.15読売)

去る8月23日付「光明日報」に創設された文芸欄が「水滸伝」批判の火ぶたを切って以来、中国ではいま、激しく「水滸伝」批判のキャンペーンが展開されている。8月31日には、「人民日報」が「紅旗」第九号の「水滸伝」を反面教材として、人民に投降派を知らせようという特集のなかから「水滸伝」にたいする評論を重視しよう」との「紅旗」編集部短評を掲載し、ついで9月4日には、「人民日報」社説「水滸伝」にたいする論評を繰り広げよう」が発表された。

今回の「水滸伝」批判は、政治・思想闘争の方向を歴史的題材に求める方法といい、まず「光明日報」(本来は民主諸党派の共同機関紙だが、実際は江青夫人ら党の文化官僚の影響下にあるようだ)の文芸欄が皮切りで、「紅旗」(党理論誌)、「人民日報」(党機関紙)へとエスカレーターして論陣が張られている経過といい、姚文元の一海瑞批判—に始まった文化大革命の初期の状況を想わせるものがある。

しかも、右の「人民日報」社説によると、今回の「水滸伝」批判は、一偉大な指導者毛主席の指示に従って行なわれているという。そして、「人民日報」社説は、毛沢東が最近、次のような内容の「水滸伝」批判を行なったことを明らかにした——「水滸伝」は汚職官吏に反対するだけで、皇帝には反対しない。晁蓋は百八人から除外されている。宋江は投降し、修正主義をおしすすめて、晁蓋の聚義庁を忠義堂にかえ、招降をうけ入れた。宋江と高俅の闘争は、地主階級内部における一派が他の一派に反対する闘争である。宋江は投降すると、方臘を討ちこいた。つまり、「水滸伝」は農民蜂起軍の創始者、晁蓋を梁山泊の群雄から除外し、汚職官吏・高俅を撃った投降主義者の宋江を英雄視しているが、宋江も方臘と同じ地主階級内部の首領であり、朝廷とのたたかいを避けて招降したその投降主義、修正主義の正体を是非ともあはかねばならない、というのである。しかも、「人民日報」社説で最も注目すべき点は、このような宋江の投降主義を一農民の限界性として、そのように見るのが、史的唯物論の観点—だと称する者がいる、としてるところである。ここにおいて「水滸伝」批判は、文化大革命初期のように、今日の中国指導部内部の一現代の宋江—は誰か、というすぐれて政治的な課題に転ざざるを得ないのである。

私は今回のキャンペーンが、今夏の杭州事件のような中国内部の深刻な政治的・社会的矛盾と無関係に生起しているとは思えないが、すでに香港では去る7月下旬、先の毛沢東の「水滸伝」新訳を体した「水滸伝新談」(雙葉著)が中国系の公認書店で発売されていることからしても、今回のキャンペーンの一斉開始という経過からしても、中国内部ではかなりの準備がなされていたものと思われる。投降主義批判といえは、まず周恩来批判とも思われるが、やはり最近の状況からすれば復権後の活躍が目覚しく、党(政治局常務委)・軍(解放軍総参謀長)・政(國務院副総理)をにぎってしまった観のある鄧小平批判と見るべき理由は数多くある。香港でも鄧小平批判と見る意見が多いが、杭州事件以来、王洪文に陸りがあることから王洪文批判とする見方は、はたまた張春橋批判という見方もあって、この点は、もう少し材料が出ないとなんともいえない。ただ「水滸伝」批判がたんなるイデオロギ;闘争ではないこと、左から右への批判であることはほぼ確実であるだけに、今後の展開が注目されるところである。

「人民日報」社説は、毛沢東が最近、次のような内容の「水滸伝」批判を行なったことを明らかにした——「水滸伝」は汚職官吏に反対するだけで、皇帝には反対しない。晁蓋は百八人から除外されている。宋江は投降し、修正主義をおしすすめて、晁蓋の聚義庁を忠義堂にかえ、招降をうけ入れた。宋江と高俅の闘争は、地主階級内部における一派が他の一派に反対する闘争である。宋江は投降すると、方臘を討ちこいた。つまり、「水滸伝」は農民蜂起軍の創始者、晁蓋を梁山泊の群雄から除外し、汚職官吏・高俅を撃った投降主義者の宋江を英雄視しているが、宋江も方臘と同じ地主階級内部の首領であり、朝廷とのたたかいを避けて招降したその投降主義、修正主義の正体を是非ともあはかねばならない、というのである。しかも、「人民日報」社説で最も注目すべき点は、このような宋江の投降主義を一農民の限界性として、そのように見るのが、史的唯物論の観点—だと称する者がいる、としてるところである。ここにおいて「水滸伝」批判は、文化大革命初期のように、今日の中国指導部内部の一現代の宋江—は誰か、というすぐれて政治的な課題に転ざざるを得ないのである。

私は今回のキャンペーンが、今夏の杭州事件のような中国内部の深刻な政治的・社会的矛盾と無関係に生起しているとは思えないが、すでに香港では去る7月下旬、先の毛沢東の「水滸伝」新訳を体した「水滸伝新談」(雙葉著)が中国系の公認書店で発売されていることからしても、今回のキャンペーンの一斉開始という経過からしても、中国内部ではかなりの準備がなされていたものと思われる。投降主義批判といえは、まず周恩来批判とも思われるが、やはり最近の状況からすれば復権後の活躍が目覚しく、党(政治局常務委)・軍(解放軍総参謀長)・政(國務院副総理)をにぎってしまった観のある鄧小平批判と見るべき理由は数多くある。香港でも鄧小平批判と見る意見が多いが、杭州事件以来、王洪文に陸りがあることから王洪文批判とする見方は、はたまた張春橋批判という見方もあって、この点は、もう少し材料が出ないとなんともいえない。ただ「水滸伝」批判がたんなるイデオロギ;闘争ではないこと、左から右への批判であることはほぼ確実であるだけに、今後の展開が注目されるところである。

私は今回のキャンペーンが、今夏の杭州事件のような中国内部の深刻な政治的・社会的矛盾と無関係に生起しているとは思えないが、すでに香港では去る7月下旬、先の毛沢東の「水滸伝」新訳を体した「水滸伝新談」(雙葉著)が中国系の公認書店で発売されていることからしても、今回のキャンペーンの一斉開始という経過からしても、中国内部ではかなりの準備がなされていたものと思われる。投降主義批判といえは、まず周恩来批判とも思われるが、やはり最近の状況からすれば復権後の活躍が目覚しく、党(政治局常務委)・軍(解放軍総参謀長)・政(國務院副総理)をにぎってしまった観のある鄧小平批判と見るべき理由は数多くある。香港でも鄧小平批判と見る意見が多いが、杭州事件以来、王洪文に陸りがあることから王洪文批判とする見方は、はたまた張春橋批判という見方もあって、この点は、もう少し材料が出ないとなんともいえない。ただ「水滸伝」批判がたんなるイデオロギ;闘争ではないこと、左から右への批判であることはほぼ確実であるだけに、今後の展開が注目されるところである。

私は今回のキャンペーンが、今夏の杭州事件のような中国内部の深刻な政治的・社会的矛盾と無関係に生起しているとは思えないが、すでに香港では去る7月下旬、先の毛沢東の「水滸伝」新訳を体した「水滸伝新談」(雙葉著)が中国系の公認書店で発売されていることからしても、今回のキャンペーンの一斉開始という経過からしても、中国内部ではかなりの準備がなされていたものと思われる。投降主義批判といえは、まず周恩来批判とも思われるが、やはり最近の状況からすれば復権後の活躍が目覚しく、党(政治局常務委)・軍(解放軍総参謀長)・政(國務院副総理)をにぎってしまった観のある鄧小平批判と見るべき理由は数多くある。香港でも鄧小平批判と見る意見が多いが、杭州事件以来、王洪文に陸りがあることから王洪文批判とする見方は、はたまた張春橋批判という見方もあって、この点は、もう少し材料が出ないとなんともいえない。ただ「水滸伝」批判がたんなるイデオロギ;闘争ではないこと、左から右への批判であることはほぼ確実であるだけに、今後の展開が注目されるところである。

私は今回のキャンペーンが、今夏の杭州事件のような中国内部の深刻な政治的・社会的矛盾と無関係に生起しているとは思えないが、すでに香港では去る7月下旬、先の毛沢東の「水滸伝」新訳を体した「水滸伝新談」(雙葉著)が中国系の公認書店で発売されていることからしても、今回のキャンペーンの一斉開始という経過からしても、中国内部ではかなりの準備がなされていたものと思われる。投降主義批判といえは、まず周恩来批判とも思われるが、やはり最近の状況からすれば復権後の活躍が目覚しく、党(政治局常務委)・軍(解放軍総参謀長)・政(國務院副総理)をにぎってしまった観のある鄧小平批判と見るべき理由は数多くある。香港でも鄧小平批判と見る意見が多いが、杭州事件以来、王洪文に陸りがあることから王洪文批判とする見方は、はたまた張春橋批判という見方もあって、この点は、もう少し材料が出ないとなんともいえない。ただ「水滸伝」批判がたんなるイデオロギ;闘争ではないこと、左から右への批判であることはほぼ確実であるだけに、今後の展開が注目されるところである。